

Title	現代日本語における格助詞「から」の体系的記述に向けて
Sub Title	Pour une description systématique de la particule kara en japonais contemporain
Author	芦野, 文武(Ashino, Fumitake) 伊藤, 達也(Ito, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.54 (2022.) ,p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20221231-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代日本語における格助詞「から」の 体系的記述に向けて

芦野 文武*
伊藤 達也**

0. 導入

格助詞「から」は多義的な言語アイテムである。日本語文法記述研究会（編）（2009）（以後「日文研」と略記）は以下の表に見られるような意味・用法を区別している。

用法		例文
① 起点	移動の起点	(1) 子供たちが教室 <u>から</u> 出てきた。
	方向の起点	(2) <u>ここ</u> から富士山がよく見える。
	範囲の始点	(3) 本を 10 ページ <u>から</u> 読み始める。
	変化前の状態	(4) 信号が青 <u>から</u> 黄色に変わる。
② 主体	動きの主体	(5) 私 <u>から</u> 集合時間を連絡しておきます。
③ 起因・根拠	出来事の原因	(6) たばこの火の不始末 <u>から</u> 火事になった。
	判断の根拠	(7) 隣の部屋の人物が誰なのか、甲高い声 <u>から</u> 分かった。
④ 経過域	空間的な経過域	(8) 虫は窓 <u>から</u> 出て行った。
⑤ 手段	構成要素	(9) 国会は衆議院と参議院 <u>から</u> 成り立っている。

（日文研（2009：6）より引用。ただし、用法と例文の番号は本稿執筆者が追加した。）

これ以外にも次のような用法が認められる。『明鏡国語辞典（第三版）』（以後『明鏡』）から2つのタイプの例を挙げよう。

(10) 金は100万からかかる。（『明鏡』）

(11) 先生から（して）そんな服装では困ります。（『明鏡』）

『明鏡』は、(10) については、「(数量を表す語に付いて) それ以上であることを表す」、(11) については、「(しばしば「して」を伴って) 最も基本的なものを挙げ、他はまして、と

*慶應義塾大学文学部仏文学専攻 **名古屋外国語大学外国語学部フランス語学科

強める」と記述している。

さらには、先行研究でも辞書でもほとんど取り上げられていない次のような用法もあり、分類を考える必要がある¹⁾。

(12) 子供たちを交通事故から守る。

本稿は、上に挙げたような「から」の多義性を説明できるような統一的な仮説を提案し、それぞれの意味・用法が仮説からどのように構築されるのかを明らかにすることを目的とする。さらには、「から」が関係づける X と Y の間の異なる関係に基づいて 3 つのタイプの機能を区別し、「から」の意味・用法の分類を試みる。

1. 先行研究

格助詞「から」は既に多くの先行研究で扱われているが、その本質的機能を「起点」の標示とすることに関しては概ねコンセンサスがみられるようである (cf. 荒 1983, 渡辺 1983, 菅井 2007; 2008, 森山 2008, etc.)。

認知言語学的アプローチから菅井 (2007) は「から」の意味用法として「位置変化の起点」, 「状態変化の起点」, 「エネルギー伝達の起点」, 「発生の起点」, 「因果関係の起点」, 「時間軸上の起点」の 6 つを区別するが、これらに統一的な説明原理を与えるための道具立てとして Johnson (1987) の〈起点—経路—着点〉スキーマを援用し、さらに〈起点—過程—終点〉スキーマを加え、「から」を「はじまりの局面」である起点をプロファイルすると特徴づける。上記の〈起点—過程—終点〉スキーマに A. Herkovits (1986) の「耐久性」(「スキーマが基本的内部構造を保持したまま回転や変形(収縮される)性質」)の概念を援用し、「順序の起点」(cf. 「太郎は原書を第 2 章から翻訳した」)も説明しようとする。また「から」が標示するとされる「奪格」の意味素性として「遠隔性」という概念も併せて提示している。

同じく認知言語学的立場から森山 (2008) は「から」のプロトタイプを「移動の起点」とし、「何らかのプロセスの事態において、その起点をプロファイルする(経路も含意する)」(p. 214) というスキーマを提案する。

格助詞についての最近の研究である盤若 (2015) は、「から」の「コア・イメージ」を「一連の過程あるいは出来事の起点」とし、格助詞「を」と異なり「どこかへ向かって進んでいくという移動のイメージがなく、離脱点だけを表す」(p. 202) と述べる。

本稿でも、「から」は一貫して「起点」をマークすると考える視点を採用する。ただし、「起点」の意味を、「出発点」との関係ではなく、結果・目的(地)へ至る一連のプロセス(連

1) この用法に言及している数少ない研究である渡辺 (1983: 372) は、分類の位置を「不明」としている。

鎖) との関係においてである。

2. 「から」の仮説と3つの機能

本稿では、「から」の統一的な仮説を以下のように提案する。

「XからY」の形式において、「から」はXを、Yがその要素となるような連鎖の起点として定義する。XとYの間は他性の関係にある。

- Xは「から」が標示する名詞句、Yは発話内の「Xから」を除いた部分に相当する。例えば、「太郎が建物から出る」のような自動詞構文においては、Yは「太郎が出る」に相当する。他動詞構文においては、「太郎がハンドルから手を離す」のような二項動詞の場合は、Yは「太郎が手を離す」にあたり、「太郎が花子から花束をもらった」のような三項動詞の場合には、Yは「太郎が花束をもらった」に相当する。そして、Yを構成する述語をp、同じくYを構成する動詞の補語をyとする。(例：太郎 (= y) が建物 (X) から出る (= p))。
- XとYは「連鎖」を形成し、Xはその起点とマークされる。「連鎖」は、「局面」、「推論の過程」、「作成の工程」、「変化のプロセス」、「伝達のプロセス」、「要素の連続」など、文脈によって様々な解釈を受ける。
- XとYの間の「他性」の関係とは、主にXとYの間の「質的差異」、「時間的差異」、「空間的距離」などを意味するが、XとYに相当する名詞句の語彙的特性によってこれ以外の解釈も受ける。
- 以上の説明を要約するために、1つ例を挙げよう。「カレーをルーから作る」において、「から」で標示された「ルー」(X)が「起点」のステータスを与えられるとは何を意味するのであろうか？それは、「ルー」(X)とカレー(y)の関係が、「材料」—「料理」という関係(カレールーを使ってカレーを作る)ではなく、カレー作りという調理工程の中の、「カレー作りの最初の工程」—「カレー作りの工程全体」として捉えられるということである。つまり、「ルー」の解釈は、「から」によって起点として規定されることで、カレー作りのプロセス(=連鎖)の中での最初の工程として限定されるのである。このことは、「から」が部分的に動詞の解釈自体をも限定することも意味する。つまり、「から」との共起によって、動詞「作る」が表す「生産」は、そのプロセス的側面が強調されるに至るのである。また、この例においては、「カレー作りの工程の最初の段階」と解釈される「ルー」(X)と「カレー作りの全工程」と解釈される「カレー」(y)の間には、それぞれ構成要素／全体という異なるステータスが認められるという意味で質的差異(他性)がある。
- 本稿では、Xが、それがYと形成する連鎖の起点であるという関係は、「から」のすべての意味・用法が共通して持っているが、Xがどのような意味でYの起点であるかは「から」と

ともに現れる語彙単位の性質によって多様な現れ方をすると考える。

この考え方に基づき、次のような「から」の3つのタイプの機能を区別する²⁾：

- I. 構築の「から」：Xが、「起点」としてYと連鎖を「構築」する。
- II. 特定化の「から」：Yによって表された連鎖の中で、Xを「起点」として「特定化」する。
- III. 補完の「から」：Yを構成する述語p自体がその意味を構成するパラメタとして広い意味での「起点」を要求し、XはYを補完する³⁾。

以下、I～IIIの機能を順番に分析する。その際、冒頭で挙げた日文研（2009）のリストにある用例がいずれのタイプで分析されうるのかも示す。

3. I. 「構築」を表す「から」

この第1のケースで扱われる例では、Xを起点として、どのようにYを含む連鎖が「構築」されるかに焦点が当たっていると考えることができる。その意味で、ここで問題になるのは、Xを起点としたYへの「展開」である。

以下、この枠組みで、「原因」と「判断の根拠」と呼ばれる意味を考える。

3.1. X－Y：出来事の連鎖（「原因」）

まず、「原因」を表すとされる「から」を分析する。『大辞泉 第3版』は、「原因」を、「ある物事や状態を引き起こしたもとなった事・出来事」と定義している。しかし、「から」は、この定義内に読み取れるような、「引き起こすもの」(X)と「引き起こされるもの」(Y)という、2つの出来事の間非対称的関係を表しているのではないように思われる。

本稿の仮説に従えば、「から」が表しているのはあくまでも、XとYを出来事の連鎖として捉えていることである。Xはこの連鎖における「起点」、すなわち一連の出来事の中で最初に起こった出来事／最初の局面として規定されていると考えられる。

(13) たばこの火の不始末から火事になった。(日文研 2009)

(14) 些細なことから殺し合いが起きた。

(15) 不安から手が震えた。

2) 芦野・伊藤（2019）では格助詞「で」について、芦野・伊藤（2022）では「に」について、この3つのタイプの機能を区別した記述を行っている。

3) 例えば、後述するように、「100人の候補者から3人を選ぶ」においては、「選ぶ」という動詞自体が、「起点」と解釈されうる「選択肢の集合」をその意味として含んでいると考えることができる。その意味で、「から」はX（「100人の候補者」）をその「起点」として補完する機能を持つ。

(13) では、「から」は「たばこの火の不始末」(X) を、「火事」(Y) を最終局面とする一連の出来事の連鎖（消えていなかったタバコの火が回りに燃え移って火事に至るプロセス）の最初の局面として導入している。

(14) と (15) も同様の分析が可能であり、(14) では、取るに足らないことが大事へと至ったことが、(15) では、不安状態が手の震えの発生につながったことが意味されている。いずれの例でも、X と Y の間に時間的差異（他性）が存在することが必要であり、それが X と Y の連鎖の形成を担保していると言える。この X と Y の間の他性こそが、「から」が表す「原因」に、「遠因」(cf. 山田 (2003)) や「遠隔性」(cf. 菅井 2008) といった解釈を与えると考えられる。

したがって、次のような例では「から」に制約がかかる。

(16) *地震から街が壊滅した。

(17) ?そんな些細なことからもめているの？

(16) においては、「地震」(X) と「街の壊滅」(Y) の関係を、時間的差異がある 2 つの別々の局面としてみなすことができないため「から」は使えない。(17) では、Y の「ている」は、事態を進行相として捉えるため、Y を X とは異なる 1 つの完結した事態としてみなしにくくなるのが理由であると思われる。「から」の使用は次のような Y の調整を経ることで可能になる。

(18) そんな些細なことから {もめ始めたの／もめごとが生じたの} ？

「始める」や「生じる」は「新たな事態」の出現を意味するため、Y を X とは時間的に区別された出来事として把握することが可能になるからである。

以上のように、X と Y の間の連鎖の構築は「から」が特権的に表すものであり、その点が、同じく原因を表すとされる「で」や「に」とは異なる点である。

(14') 些細なことで殺し合いが起きた。

(15') 不安に手が震えた。

「で」は、X を Y の「媒介」(利用されるもの・有効であるもの) (cf. 芦野・伊藤 (2019))、
「に」は X を Y の「基準」と定義する (cf. 芦野・伊藤 (2022)) としよう。この仮説に基づくと、
(14') で「で」が使われると、X は Y が実現するのに「足る」出来事として把握されることになる。
(15') では、「不安」(X) は、「手の震え」(Y) のいわばバックグラウンドとして、Y と併存関係にあると考えられる。つまり、X は Y の基準として、X の実現を担保しているものである。つまり、「手の震え」は、「不安」の存在と不可分の形で生じるのである。

3.2. X - Y : 推論のプロセス (「判断の根拠」)

「から」が「判断の根拠」を表すとされる場合は、X と Y は推論の過程に対応すると考えられる。森田 (1989 : 763-764) は、「現場に残された指紋 (で／から) 足がついた」における

「で」と「から」の対比について、「推論の起点 (= 指紋)」が「から」によって示され、それによって推論の過程が表出される」のに対し、「で」は「単なる「理由説明」」であるという興味深い指摘を行っている。

森田 (1989) の指摘を本稿の枠組みから言い換えれば、「から」は、X を、Y で表される広い意味での「判断 (結論)」に至る推論の出発点 (「推論の最初の段階」) と規定するとなる。つまり、X と Y の連鎖は、X を起点とする推論のプロセスと理解される。

(19) 隣の部屋の人物が誰なのか、甲高い声から分かった。(日文研 2009)

(20) 保存状態などから、この絵が描かれたのが 1980 年代と予想される。

(19) においては、「隣の部屋の人物」の同定に関しての推論過程が問題になっている。この推論過程において、「から」は「甲高い声」(X) をその「起点」(第一段階) と規定し、それが最終段階である判断 (Y) に至ることを示している。(20) においては、絵の年代鑑定についての推論に関して、「保存状態など」(X) を出発点として、予想としての結論 (絵が 1980 年代のものであること) に至る過程が述べられている。

(19) において「から」を「で」で置き換えた次の文では、「甲高い声」(X) のステータスが異なる。

(19') 隣の部屋の人物が誰なのか、甲高い声で分かった。(日文研 2009)

「で」は「甲高い声」(X) を、Y で表される判断を有効にしたもの／決定づけたもの (cf. 「媒介」) と規定すると考えられ、その意味で「甲高い声」(X) は「判断に至る有益な／決定的な手掛かり」としていわば後付け的に提示されるのである。

3.3. まとめ

以上、2つの用法を通じて「構築」を表す「から」の意味を主に「で」にも言及しながら検討した。いずれも、「起点」として規定された X が、Y と連鎖を作るということに焦点があたりと考えられるが、「原因」の用法においては、X は Y と出来事の連鎖を作るのに対し、「根拠」用法においては、X が Y と創り出すのは推論のプロセスであると言える。

4. II. 「特定化」を表す「から」

構築の「から」においては、X を起点として X - Y という連鎖を作るという側面にウエイトが置かれていた。それに対してここで扱う「特定化」の「から」においては、ア・プリオリに Y 自体が様々な意味で連鎖と関わり、X をその連鎖の起点として指定するという機能を持つという仮説を立てる。つまり、特定化の「から」においては、連鎖は既に文脈的に与えられており、X は何がその起点なのかを同定するのである。したがって、この特定化のケースにおいては、X は常に他の潜在的なタームのクラスと競合関係にある。

特定化の「から」に入るいずれの例でも、Xは述定関係Y全体を特定化すると考えるが、Xが述定関係を構成するy（「が」、「を」、「に」などの助詞によって標示される名詞句）または述語pのいずれの構成要素をスコープとして特定化するかによって3つの場合を区別する。すなわち、Xが特にyを特定化する（4.1.）、Xが特にpを特定化する（4.2.）、XがY（y-p）をブロックとして特定化する（4.3.）ケースである。

4.1. Xがpを特定化する

このケースでは、XはY（y-p）のうち、特にpを特定化すると考えられる。冒頭の日文研（2009）のリストにある、「動きの主体」、「移動の起点」、「変化前の状態」、「経路」、「方向の起点」がこのケースとして分析できると考えられる。また、それ以外の意味として、「受動態の動作主」もこの枠組みで取り上げる。

4.1.1. 動作主の特定化（「動きの主体」）

(21) 皆には私から集合時間を連絡しておきます。（日文研 2009。一部改変）

(22) さっき太郎から私の妹のところに電話があったそうだ。

これらの例においては、「連絡すること」、「電話があったこと」などのpは、方向性を持った述語関係（連鎖）を導入する。それは、他性の関係にある「送信者」／「受信者」の間で生じる連鎖であり、後者はy（二格名詞句：「皆」）に相当する。このような方向性を持った連鎖関係が与えられたうえで、「から」は、そのうちのX（「私」）を、潜在的に送信者になりうる複数の主体のクラスから競合的に選択し、起点（＝送信者）として指定しているのである。

—「イニシアティヴ」

次の例では、最初にアクションを起こすという「イニシアティヴ」の効果が加わっている⁴⁾。

(23) そんな話、こっちからお断りだよ。

(24) こっちから離婚を切り出してやった⁵⁾。

(23) では、会話内での「話し手」と「聞き手」、(24) ではカップルの「一方」と「他方」

4) 張（1995：50-51）は、このような「から」が「イニシアティヴ」や次に見る「自発」の意味効果を持つ用法を「副助詞の用法でもなく動作主提示的でもないカラ」と呼び、前者を「複数の動作主が同一行為をする時に、順序的に一番先の動作主を受ける」、後者を「動作主と同時に具体的な物や言語情報が移動する場合での移動の起点的意味をも兼ねてもつ名詞句を受ける」と特徴づけている。そのうえで、このような「から」を、「相互動詞の場合のように、二者が互いに動作主と受動者の役割を兼ねている。双方から発する動作、行為は必ずしも同一のものではないが、常に相手を目指すものであって、そういう意味で前後関係が含意されているかもしれない」としているが、「前後関係」は、「イニシアティヴ」用法には認められるものの、「自発用法」には関与的ではないように思われる。

5) 類例として「こちらからメールします」、「どちちから告白したの？」などがある。

という二要素だけのクラスからXが選択されるために、「他を差し置いて」という価値がつけ加わっていると考えられる。これらの例では、Xをクラスから選択することで、競合する他の可能性を排除することが顕著である。

p「断る」や「離婚を切り出す」は、主体間に、(21)、(22)で見たような「送信者」／「受信者」のような関係は作り出さないものの、相手を必要とし相手への働きかけを前提とするという意味で、述語関係に方向性を導入していると考えられる。ここで導入される方向性は、(23)では「断る主体」／「断られる主体」、(24)では「離婚を切り出す主体」／「離婚を切り出される主体」とでも呼べるような、別々のステータスを持った主体の間に生ずる方向性である。そのようなコンテキストの中で「から」は「断り」や「離婚の切り出し」行為の出発点として「こっち」を指定しているのである。

一「自発」

次の例では、行為の「積極性」や「自発性」の意味効果が生ずる。

(25) 子供が自分から進んで勉強し始めた。

(26) 部下がやっと自分から動くようになった。

まず確認しておきたいのは、これらの例のp「勉強し始める」、「動く」は、「送信者」／「受信者」の場合や、「断る主体」／「断られる主体」のように、pの意味自体によって、一方の主体から他方の主体に対しての行為の方向性が作り出される動詞ではない。つまり、これらのpは、それ自体としては異なる主体の間には方向性をもった述語関係を導入しない。しかし、この例においても、方向性という概念を回収することは不可能ではない。

このケースに方向性が想定できるとすれば、それは「行為pを促す主体」と「行為pを促される主体」の間の方向性と考えられる⁶⁾。

この考え方に基づく、Xは、p(勉強する／働く)を実現することを「促す主体」のクラスから選択されたタームと考えることができる。ところが、この選択されるXは(「母親」や「上司」ではなく)まさに「自分」であるということがわかる(このことは、X(「自分」とy(「子供」「部下」)が同一の指示対象であるということが示している)。すなわち、それは、pを実行するのはy(「子供」／「部下」)であるが、それを促すのも「自分」(自身)(X)ということの意味する。別の言葉で言えば、「促す主体」としての自分自身が「促される主体」としての自分自身でもある」という、いわば自分自身が2つの役割を同時に担うということでもある。つまり、(他者から促されるのではなく)「自分自身が自分自身を促す」ことによって、pを実行するのである。「自発」という解釈はまさにここから生じる。

6) 「行為pを促される主体」はpを実現する主体でもある (cf. (25)においては、「子供」はp「勉強する」を促される主体であり、かつp「勉強する」を実行する主体でもある)。

「自発」の意味を強調するために、自分の意志と他者の意志の対比が文脈に現われることもある。

(27) こんな会社、言われなくても、自分からやめてやる。

(28) 太郎は、追い出されたのではなく、自分からいなくなったのだ。

(27) の「言われなくても」は、他者（会社側）による行為の促しによってではなく、自分の意志で p を実行することを強調している。(28) では、「追い出される」ことによって「いなくなる」のではなく、自分がその起点であることが強調されている。

一受動態の動作主

熊井 (2018) は、受け身の動作主標示に関して、今まで「から」を用いないとされてきたタイプの動詞でも、「動作主」が何らかの意味で「起点」と解釈されるような場合には、「から」が積極的に使用される傾向があることを明らかにしている。

そのうち 2 つ引用すると、「二つのサイドのどちらかを明示」する文脈、「出所を強調」する文脈である。

(29) 取り調べを行ったとしたら、裁判で弁護側から誘導尋問として厳しく追及されるのは必定であろう。(熊井 2018 : 17)

(30) とくに、校長から一方的に「問題教師」扱いされた先生の苦しみは深い。(Ibid.)

(29) では、「検察側と弁護側」の 2 つの立場のうちの 1 つが明示され、(30) では「一方的に」という副詞が出所を強調していると分析されている。さらには、動作主が「社会通念」とは異なる場合にも「から」の積極的使用が認められるとしている。次の例では「甘えるのは男性よりは女性、年上よりは年下というイメージ」が逆転しており、そこから意外性が表現されていると分析されている。

(31) 年上の男性から甘えられる。(Ibid.)

熊井 (2018) の分析を本稿の立場から言い換えるならば、受動態で用いられる「から」は、ある方向性をもった述語関係 p (受け身の事態) を実現する可能性のある動作主のクラスを導入し、そこから競合的に選択された X を p の起点 (「動作主」) として特定化することであると言える。したがって、「イニシアティヴ」, 「自発」の用法と同様に p に関わる主体のクラスが想定され、何が X として選択されるのかに注目した用法であると言える。

(32) 秋田工業高校の野球部では、上級生から事あるごとに殴られるのがいやで、やがてサボるようになった。(落合博満) (<https://number.bunshun.jp/articles/-/851036>) [2022 年 9 月 20 日閲覧]

(33) 愛情を注いでいる飼い犬から噛まれるということは、愛情を注いでいる人物から裏切られるかもしれないという警告夢なので注意が必要です。(https://cherish-media.jp/posts/3122) [2022 年 9 月 20 日閲覧]

(32) では、「殴る」という行為は、ア・プリアリには、先輩と後輩 (= 落合) のどちらも互いに対して行うことができるが、先輩が後輩を (一方的に) 殴る (先輩は殴る者・後輩は殴られる者) のは、熊井 (2018) の言う「社会通念」に即していると言える。それに対して (33) の「噛む」という行為については、通常このような両方向性は想定できない。他人の飼っている犬や野良犬と異なり、通常「愛情を注いでいる飼い犬」は飼い主を噛まないと予想されるが、「から」は、まさにその「飼い犬」が X として選択されることを意味しているのである。

4.1.2. 「内部」／「初期状態」の特定化 (「移動の起点」「経路」「変化前の状態」)

「移動の起点」, 「変化前の状態」と呼ばれている用例では、「から」は X を、p で表される「移動」／「変化」が起こる前の「位置」／「状態」を「起点」と指定すると考えられる。ここでは、移動や変化を表す動詞のうち、「出る」と「変わる」のみ扱い、「移動前の位置」や「変化前の状態」が、これらの動詞においては何に相当するのかを、これらの動詞の意味についての仮説に基づいて明示する。したがって、ここで扱う例においては、X が p を特定化することを、X が p の意味を構成するパラメタの 1 つを「起点」として特定化しているという意味で理解することになる。

(34) 子供たちが教室から出てきた。(日文研 2009) (「移動の起点」)

(35) 虫が窓から出て行った。(Ibid.) (「空間的経過域」)

「出る」の意味を仮に「内部から外部への移動」とすると、この動詞は方向性を持つ述語関係を導入すると言える。その方向性は「内部」—「外部」という他性の関係に置かれた連鎖である。

(34) においては、「から」は「教室」(X) を「内部」としての「起点」と指定している。「外部」は明示されていないが「(教室の) 外の空間」と解釈できる。(35) の文脈を、観察者が家の中にいて、虫が窓を通して外に出たことを観察するという意味に限定しよう。ここにおいても「出る」の意味は同じだが、「窓」(X) は、「教室」のような、外部と他性の関係にある内部の空間を意味するのではなく、内部と外部の境界を意味する。したがって、「空間的経過域」(日文研) や「経路」を表すとされる (35) においては、「から」は、「窓」(X) を、「境界の内側 (家の中側)」としての「内部」として「起点」と指定すると言えるだろう。

(36) 信号が青から黄に変わる。(Ibid.) (「変化前の状態」)

(36) の「変わる」の意味を、仮に「状態 1 がそれとは異質の状態 2 になる」と定義しよう。すると、「出る」と同様に、「変わる」も方向性を持つ述語関係 (状態 1—状態 2 の連鎖) を導入すると言える。「から」は、「青」(X) を「状態 1」としての「起点」と規定する。「状態 2」は「黄」である。

4.1.3. 「アクセス方法」の特定化（「方向の起点」）

- (37) ここから富士山がよく見える。(Ibid.) [方向の起点]
(38) 太郎はこの問題に {真正面／別の観点／患者の立場} から取り組んでいる。
(39) 太郎はいつも横から口を出してくる。
(40) 太郎が頭から落ちた。

この用法においては、p がどのように実現されるのかが問題になっており、X は p へのアクセス方法という意味で「起点」と解釈することができる。X は、「方向」、「視点」、「立場」など複数性をその意味の基盤に持つ名詞に相当するのが特徴であり、X が複数のアクセス方法のクラスから競合的に選択されるという側面が強調される。様々なアクセス方法のうちどのアクセス方法が p を実現するのかが問題になるのである。

これらの例においては、(39) や (40) のように、X に来る名詞句の語彙的性質によっては、特殊な意味効果を加えられることもある。例えば、(39) では、「横」は、空間的な解釈ではなく、「無関係な立場⁷⁾」という解釈を受けると考えられる。(40) では、「頭」(X) を起点にして「落ちる」ことが、「通常とは逆の落ち方」や「危険な落ち方」のような意味効果を加えていると考えられる。

4.2. X が y を特定化する

4.1. では、「から」で標示された X が、Y のうち、特に p を特定化するケースを分析したが、ここでは X が特に y を特定化すると考えられるケースを扱う。日文研 (2009) のリストの中の「範囲の起点」と、それ以外では「順序」の用法がこのケースとして分析できると考えられる。

4.2.1. 範囲内の要素の特定化 (1)（「範囲の始点」）

最初のケースでは、文中の y に当たる名詞句が「範囲」や「連続」と解釈され、その中の要素である X を起点として特定化することが観察される。y と X の間には、広い意味で全体 (y) と構成要素 (X) という他性の関係が認められる。

- (41) 本を 10 ページから読み始める。(日文研 2009)

この例では、ページの連続と捉えられた「本」(y) について、その「10 ページ (目)」(X) が読書が始められる起点として特定化されている。

次の例では、X が広い意味で y の「最も基本的な構成要素」として解釈される例である。X に相当する名詞句の解釈はその語彙的性質によって異なる。

7) 『明鏡』は「横」の定義の1つとして、「見当外れで無関係な（また、道理に合わない）方向や場所。横の方。また、そのような立場」を挙げている。

(42) カレーをルーから作る。

(43) 計画を根本から見直す。

(44) 敵は 100 人からいる。

冒頭で見たように、(42) では、「カレー」(y) は、いくつかの工程から構成される「調理工程」と理解される。そのうちの最初の工程と解釈される「ルー (作り)」(X) が、カレー作りの起点として解釈されるため、市販のルーを使うことによってこの工程を省かない、いわば「本格的なカレー」という意味効果が生じ得る。(43) では、「計画」(y) の「最も重要な部分」として解釈される「根本」(X) が見直しの起点となることから、「根本的な見直し」「全体的な見直し」という解釈が生ずる。(44) では、y は明示されていないが、「敵の総数」と解釈できる。その中で「100 人」(X) が「起点」と指定されるため、「敵が最低 100 人はいる」「100 人以上はいる」という意味が生ずるのである。

このように、このケースでは、全体の中で最も基本的とみなされる要素が連鎖の「起点」として同定されるため、しばしば「強調」の意味効果をもたらす⁸⁾。

(45) この小説は最初の 1 ページ目から既に面白い。

これは、「この小説」がその先も面白いことを予感させる言い方であり、しばしば「既に・もう」などのある状態成立の早期性が強調されるマーカーと共起する⁹⁾。

この強調の効果は「～からして」という定型表現に特に顕著である。冒頭で既に見たように『明鏡』は、その意味を「(しばしば「して」を伴って) 最も基本的なものを挙げ、他はまして、と強める」と記述している¹⁰⁾。

8) Xに「日頃」や「日常」などが来る「日頃から災害に備えている」、「健康には普段から気を付けている」、「山田さんには普段からお世話になっている」のような例文でもXを「最も基本的なもの」と解釈することは不可能ではなく、それは生活を構成する時間の中で、「特別な機会」や「例外的な機会」などの「非日常」に対立するような、「日常」「平常時」である。

9) このタイプの例文の類例として、「朝(つばら)から何の用だ」、「朝(一)からほーっとしてるんじゃないよ」、「この動画を見て、朝からいい気分になった」、「あいつは朝から酒を飲んでいる」、「(月曜の)朝から厄介ごとはごめんだ」などがある。X(「朝」)は、朝・昼・夜からなる一日という時間的範囲・連続の中での最初の時間帯であり、いずれもある事態の発生が早すぎる／予想よりも早いという意味効果を生んでいる。ただし、「昼から酒を飲む」も可能で、必ずしもXは最初の時間帯である必要はなく、ある行為の実行のタイミングの一般常識や慣習などに照らした早さを表すにすぎない。また、これらの例においては、Xを起点とした行為の「持続」の意味は明確には認められない(例えば、「朝から何の用だ」は、ア・プリオリには、夜まで用がありつづけることを意味しているのではなく、その通常に比べてのタイミングの早さが強調される)。なお、これらの例文は、XがY(y-p)全体を特定化するケースと考えられる。

10) ただし、「からして」は、この用法以外にも、「後続く判断の根拠。「今の状況からして、成功は望めない」、「彼の口ぶりからして、転職する気はなさそうだ」のような用法もあるが(cf『明鏡』)、これは「特定化」の「から」の機能ではなく、「構築」の「から」の「推論のプロセス」の機能と考えられる。

(46) ビジネスの基本からしてわかっていない。

(47) 先生からしてそんな恰好では困る。

(48) 着るものからして人と違う。(『明鏡』)

Xがどのような意味で「最も基本的なもの」かは、(46)では明らかだが、(47)では、「先生」は「生徒の見本」、(48)の「服装」は「人物評価の基準となる最も目につきやすいものの代表」として解釈できるだろう。

これらの例文では、明示化されていないが再構成できる集合の中で、その基本要素とみなされるXを起点とすることで、その他すべての要素にも述語関係が当てはまるという解釈が可能である。それは、「基本から応用まで」、「先生から生徒まで」、「服装から振る舞いまで」といった、代表的要素を起点として周辺の要素に至る連鎖が形成されることを意味している。

4.2.2. 範囲内の要素の特定化 (2) (「順序」を表す用法)

このケースでは、文中の要素yがpの実現に関わる要素の「集合」を形成し、Xはその集合のうち最初にpを実現する要素という意味で「起点」と解釈される。4.2.1.と同じような意味で、Xはyの要素であるという関係が成り立つ。集合内の競合する他のすべての要素もこの事態の実現に関わることから、実現の順序という解釈が生ずると考えられる。

(49) 今度の運動会では、青組から入場することになった。

(50) 一口大に切った鶏モモ肉を皮目から焼く。

(49)では運動会の文脈において、それに参加する複数のすべての組(y)の入場が想定される¹¹⁾。その中で、X(青組)は最初に入場する組であると特定化されている。(50)においては、肉を構成する「皮目」と「身の面」の2つの面(y)のうち、皮目(X)が最初に焼かれる面であるとして起点とされている¹²⁾。

(51) 職人は人形を頭の部分から作った。(菅井 2007 : 56)

この例は、人形作り(y)という工程の中で、「頭の部分」(X)を「起点」とする作り方をしたということである。行為のプロセス(人形制作)のうちのある段階を、競合関係にある他の段階のクラスから抽出し、それを起点として人形制作を行うのである。

「順序の基準」を表す例においては、ア・プリアリには集合(y)のうちどの要素が起点となってもよく、その点が、集合のうちの起点が予め固定されている「カレーをルーから作る」のような例とは異なると言える。

11) 日文研(2009:66)は、このような「から」の「順序」を表す用例について、文中の明示されていない名詞を想定するという点で「とりたて助詞」に近い性質を持つと指摘している。

12) これと類似した例として、「ヨーロッパ選手権からワールドカップに連続出場する」のような「連続」の意味を表す用法もある。この場合「から」はXを連続する2つの試合のうちの最初の試合として特定化すると言える。

4.2.3. 原料・構成要素の特定化（「材料」／「構成要素」）

ここでは、「から」が「材料」や「構成要素」を表すとされるケースを扱う。前者は、述語 p が「作る」やそれに類似する動詞によって実現され、あるモノ (X) から別のモノ (y) が生産・創造されることを意味する。後者は、「から」が、述語 p が「成り立っている」、「構成される」、「できている」などの動詞とともに用いられ、X が、「全体」に相当する y の構成要素として解釈される場合である。

これらの意味は格助詞「で」によっても表されうるため、両者で何が異なるのかを明らかにしながら対比的に検討していく。

まず、「材料」のケースから検討する。

(52) 酒は米 から／??で 造る。

(53) ベビーリーフ *から／で サラダを作る。

(54) 佐賀の酒は、佐賀の米 ??から／で。 (<https://www.saga-s.co.jp/articles/-/225222>)

[2022年9月20日閲覧]

(52) では、「米」(X) が、「酒」(y) に変容していく製造プロセスを表している。「から」は X をそのプロセスの起点、つまり「変化前の状態」として特定化する。ここでは、X と y の間に質的な他性があることが、「から」の使用にとって重要である。実際、このような質的他性が認められない場合、(53) のように、「から」の使用に制約がある。しかし、例 (54) が示しているように、X と y の間に質的他性が認められる場合でも、「で」の方が積極的に使われる文脈がある。この例は「造る」のような動詞が省略されていると考えられるが、「から」よりも「で」のほうの使用が適していると感じられるのは、「米」(X) が「酒」(y) の製造過程の起点という側面よりも、佐賀の米という特定の米こそが、佐賀の酒を製造するのにふさわしいモノ (=「媒介」という側面が勝るからであろう。米に「佐賀の」という限定がつくことで、酒を「地元の米で作った地酒」として特定化している) である。

「から」と「で」の制約には、X に相当する名詞句の語彙的性質も関わってくる。X が「ゼロ」や「無」のような名詞句の場合、「で」は使えない。

(55) ゼロ から／*で すべてを創り出す。

(56) 無 から／*で 天地を創造する。

「で」が不可能なのは、非存在を表す「ゼロ」「無」は媒介として機能できないためである。逆に「から」がこれらの名詞句を、創造プロセスの起点（「何もない状態」）として捉えることには何も問題はない。

以下の例では、「から」と「で」が両方可能だが、X のステータスが異なる。

(57) ペットボトル から／で 服を作る。

「から」が使われた場合は、「ペットボトル」(X) は、「服」(y) に生まれ変わる生成変化の起点（「再生繊維」）である。それに対して「で」が使われた場合は、X はア・プリオリには

「使用済みのペットボトル」と解釈され、例えば、それをテープなどで繋ぎ合わせることによっていささか奇妙な「服」(y)を作るために「利用されるもの」(=媒介)である。

「から」が「構成要素」を表すとみなされる場合も、同様に分析が可能である。

(58) 国会は衆議院と参議院 {から／で} 成り立っている。(日文研 2009)

(59) ナウル共和国はただ1つの島 {?? から／で} 構成された国である。

(58) では、「から」と「で」が両方可能で、かつ解釈も非常に近いが、「全体」(y)と「構成要素」(X)の関係が異なるように思われる。「から」は、「衆議院と参議院」(X)を「国会(y)が成り立つ」という生成プロセスの起点として特定化する。それは、2つの「要素」として提示されている複数の要素Xが集まって、新たな「全体」としての「国会」(y)に変容していくプロセスである。それに対して、「で」が使われた場合、「衆議院と参議院」(X)は、「国会」(y)を「構成体」として「完結」(「それ自体まとまったものとして存在できていること」cf.『広辞苑 第3版』)させる要素(=「媒介」)としてみなされると考えられる。両者の違いをまとめるならば、「から」が複数の要素が集まって全体が構成されるプロセスを強調するのに対して、「で」は、いわば全体がまず与えられ、それを成り立たせるのに必要な要素を明示すると言える¹³⁾。

(59) で、「から」に制約があるのは、「ただ1つの島」(X)と「ナウル共和国」(y)は同一の対象(Xはyそのもの)であるため、Xをyの構成プロセスの起点として解釈できないためである。

4.3. XがY(y-p)をブロックとして特定化する

最後に、XがY(y-p)をブロックとして特定化すると考えられるケースとして、「時間の起点」と、「時間的・空間的範囲」の用法を扱う¹⁴⁾。これらの用法では、XはYを構成するpとyのどちらかを特に限定しているのではなく、Y(y-p)全体が表す事態の開始時刻、時間的・空間的枠組みを特定化していると考えられる。

4.3.1. 時間の起点

(60) 10時から会議が始まる。

(61) *10時から会議が終わる。

(60)のY(「会議が始まる」)は、「始まる」の意味によって、会議の「開始点」と「持続」

13) このことは、「判断の根拠」を表す用法において、「で」がある判断の根拠を後付け的に提示するという働きと平行しているように思われる。

14) 「空間の起点」の用法においては、XがY全体を特定化している例は見つからないようであり、この用法では、Xは特にpを特定化している例に限られるようである。(cf.「太郎が東京から来る」,「遠くから応援しています」)

を前提とする、時間軸上に展開する線的關係（連鎖）を導入している。「から」は「10時」(X)をこの線的關係の始点を指定するものとして、時間軸上の時点の競合するクラスから選択している。(61)で「会議が終わる」が不可能なのは、「終わる」の意味が「持続」と「終点」を導入するため、それとは矛盾する「起点」が容認されないためであると考えられる¹⁵⁾。

次の例文では、判定詞「だ」が、「から」と結びつくことによって、「始まる」という起動相としての解釈を受ける。

(62) 明日から10月だ。

それは、「明日」が「10月の初めの日 = 10月1日」(起点)として規定され、時間軸上に展開する線的關係が導入されるからである(10月は始まって続いていく)。この意味効果は「から」に由来する。

日付を表す名詞句と共に起した場合、「から」に制約が生じる場合がある。

(63) 午前零時から10月1日 {だ／が始まる}。

(64) ??明日から10月1日 {だ／が始まる}。

(63)では、「午前零時」(X)は、(時点のクラスとして捉えられた)10月1日の始めの時点(「起点」として規定される。ポイントは、「午前零時」(X)が、「1日」である「10月1日」を、それより小さい単位である「時点の連続」として捉え、その起点を表すということである。したがって、(64)で「から」が使えないのは、それ自体「1日」と解釈される「明日」(X)が、「1日」という同じ単位である「10月1日」をそれ以下の単位の連続としては捉えられないからであると説明できる。

4.3.2. 時間・空間の範囲の起点

このケースでは、「まで」を伴う「から」が標示するXは、Yが成立する、時間的・空間的範囲を特定化していると考えられる。

(65) 当店は10月1日から3日までお休みします。

(66) 彼は2004年から2007年までドイツに留学した。

(67) 今日は北海道から九州まで雨の予報だ。

(68) ここから料金所まで渋滞が起こっている。

4.4. まとめ

以上、「Xから」がYを「特定化」しているという仮説を立てて例文を検討した。このケー

15) 「この映画は最初から終わっている」は可能である。この場合、「終わる」は映画が展開する時間軸上の「終点」を導入しているのではなく、映画を駄作として評価するという意味であり、「から」は映画の最初の部分を駄作性が明らかになる起点として導入することに矛盾はない。この例は、「この本はイントロから面白い」のようなタイプと同じくyの「特定化」の例である。

スでは、Yが様々な意味で「連鎖」と解釈されるような文脈の中で、「から」はXをYの起点であると指定する機能があることを、Xがpを特定化する場合、Xがyを特定化する場合、XがY (y - p) 全体をブロックとして特定化する場合の3つを区別しながら示した。

5. III. 「補完」を表す「から」

今まで扱った「構築」の「から」と、「特定化」の「から」においては、XはYを構成する述語pの意味論とは独立して「起点」として働いていたと言えるが、ここで扱う「補完」の「から」は、Xは述語の意味論と密接な関係があると考えられる。つまり、ここでは、述語p(動詞と形容詞)それ自体が、様々な意味で、「起点」をその意味として含んでいるケースが問題となる。その意味で、「から」が標示するXは、Yが要求する要素を補完すると言える。したがって、Xはここで扱うすべての述語において起点を表す要素であるが、他方で、個々の述語の意味論に従って、「起点」がどのように解釈されるのが異なり、それによって「から」を含む発話の解釈の多様性が生み出されると考えられる。

以下では、「選択」、「分離」、「保護」の意味を表す動詞をとりあげ、Xがどのようにこれらの動詞の意味を補完し、限定するのかを分析する。

5.1. 「選択」の意味を表す動詞と「から」

(69) 3つの中から正しい答えを選びなさい。

動詞「選ぶ」の意味は、「あるタームの集合(X)を召喚し、その中に含まれるターム(y:ヲ格名詞句)を取り出すことをマークする」と記述できる。つまり、yがXの外部に移行することを表す。このyの外在化は、yが「選択されたターム」とし、最終的には「(お互いに非差異化されている)選択されうるタームの集合」であるXとの間に質的な差異(他性)を作り出すことを意味する。

「選ぶ」の意味と、「から」の意味との間には親和性がある。というのも、「から」の仮説にあるパラメタX(「起点」)を、「選ぶ」の仮説にある「X(集合)」として解釈することが可能だからである。つまり、「から」と結びつくことによって、「集合X」は、「起点」として再定義されるわけである。

(69)では、y(「正しい答え」)が、「選択された答え」として、集合X(選択されうる正しい答えと間違った答えが混在した集合)の外部に出るわけであるが、集合Xが「から」によって「起点」と再定義されるため、「選択」という動詞が表す事態に、「最初の局面」から「別の(最終)局面」への「移行」という、「連鎖」的解釈が加えられると考えられる¹⁶⁾。

16) 「わざわざ冬を選んで北海道に行く」においては、X(集合)は明示されていないが、「季節の集合」

いずれにせよ、「から」にとって重要なのは、yがXの外に出るというメカニズムであり、この点が「で」と決定的に異なる点である。次の対比は両者の違いをよく表している。

(70) 3つの中 {で／*から}、正しい答えはどれか？

(71) 小津の作品 {で／*から} 一番好きなのは『東京物語』だ。

これらの例では、述語の意味が一見すると「選ぶ」に近いように思われるが「から」は使えない。(71)では、判定詞「だ」は、y(=東京物語)をある集合Xの中で同定するだけであり、yをXの外部に移行させることができないため、「から」とは共起できないのである。

5.2. 「分離」の意味を表す動詞と「から」

(72) ハンドルから手を離す。

「離す」の意味の仮説を暫定的に「密接に結びついたXとyの間に「距離」を導入する」と定義しよう。これに基づく、(72)は、「ハンドル」(X)と「手」(y = ヲ格名詞)は始め密接に結びついていたが、「離す」という述語を通して、Xとyの間に「距離・間隔」が導入されたことを意味する。「から」は、「手」と「ハンドル」の間に間隔が生じるプロセスにおいて、何が「起点」であるかを指定することで、動詞の意味を補完していると言える。ここでの「起点」は、「基準点」であり、yが基準点X(ここでは固定化されたモノ)に対して距離をとっていくというプロセスである¹⁷⁾。

なお、格助詞「と」も「離す」の意味を補完すると考えられるが、「から」とは異なり「起点」が示されないため、単にXとyの間に距離が生じていくプロセスを記述すると言える。

(73) A席とB席を離す。

「離す」などと同じく、「近い」、「遠い」のような形容詞も2つのタームXとyの間の「距離」を問題とし、「から」を用いることができる。ただし、(72)とは異なり、Xとyの間にはもともと距離が存在し、「から」はXを、yとの距離を測定する起点(=基準点)として定義する。

(74) 家は駅から {遠い／近い}。

基準Xに対するyの距離が広がる場合は「から」が使えるが、Xに対してのyの距離が縮まる場合は当然「から」は使えない。

(75) 椅子を机から {遠ざける／*近づける}。

として再構成できる。しかし、「から」がないため、「選ぶ」で表される事態を「連鎖」としては捉えていない。また、「3つのうち、正しい答えを選びなさい」のように、「選ぶ」を構成するパラメタである「集合」は「~のうち」によっても導入されうるが、ここでも「から」が表すような「移行」の解釈は不在である。

17) 「分ける」(「いったん入れてからではミルクをコーヒーから分けることはできない)のような動詞も、「離す」と意味特性が近く、「から」はこれらの動詞の意味を補完すると考えられる。

5.3. 「保護」の意味を表す動詞と「から」

最後に、動詞「守る」と「から」の関係について考える。仮に、「yを守る」の意味を「ある状態(y)を、それが変容しないよう、元のまま保つ」と定義しよう。「yを守る」が「から」と共起する「Xをyから守る」という形式においては、Xは広い意味で「脅威」と解釈される名詞句によって実現されることが観察できる。

(76) {台風／外的／攻撃／寒さ} から身を守る。

(77) {強盗／空き巣} から家を守る。

これらの例では、「から」は、yの(望ましくない)状態変化を引き起こしうる「脅威」としてXを標示し、その意味で、「守る」の意味を補完していると言える。したがって、「Xからyを守る」は、「Xで表される脅威に対して、yをXの影響の外に置く」というyの外在化のプロセスと解釈でき、その意味でXはそのプロセスの起点に相当する。そこから「守る」は「保護」の意味に限定されると考えられる¹⁸⁾。

「保護する」という意味において、「守る」に近い「救う」という動詞も「Xからyを救う」という形式をとることができ、Xは動詞の意味を補完していると考えられる。

(78) 友人を {窮地／借金地獄} から救う。

(79) 図書館を山火事から救う。

これらの例において、Xは「危険な状態」と解釈される名詞句によって実現され、「Xからyを救う」は、「yが危険な状態Xを逃れられるように助ける」といった意味に解釈される¹⁹⁾。

5.4. まとめ

以上、「から」と共起しやすいタイプの述語を取り上げ、「から」によって標示されるXがどのように当該の動詞・形容詞の意味を補完し、かつ限定するかを考察した。もちろん、「選択」、「分離」、「保護」は互いに異なる意味であるが、Xとyの間に広い意味での他性(外部性、距離など)があるという点で共通しており、「から」が標示するXは「他性」が構築される「起点」として機能するというを示した。

結語

本稿では、格助詞「から」の多様な意味の中の本質的機能として、「XからY」という形式において、Xを、Yがその要素となるような連鎖の「起点」として定義する。XとYの間は他

18) 「から」が使われない場合は「yを守る」となり、yには「規則」、「約束」など、それを破る(=変容)ことが否定的に評価される名詞句や、それに関しては中立である「沈黙」などの名詞句が来るが、いずれの場合も「yを保つ」という意味は共通している。

19) 「免れる」、「逸らす」、「逃れる」のような動詞もこのケースとして分析できると思われる。

性の関係にある」という仮説をたてた。同時に、この本質的機能（意味的同一性）が多様な意味（ヴァリエーション）を生み出すかに関して、XがYに対して持ちうる関係性の違いに注目し、「構築」、「特定化」、「補完」という3ケースを区別し、一見無秩序に見える多様な意味を合理的に分類・記述できる可能性があることを提案した。

さらに「から」の接続助詞的用法、終助詞的用法との関係を論じることは別稿に譲ることとする。

〔附記〕 本稿は、2022年度・慶應義塾大学学事振興資金（個人）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。

参考文献

- 芦野文武・伊藤達也（2019）：「現代日本語における格助詞「で」の多義性の理解に向けて」、『言語・文化・コミュニケーション』, 51, 慶應義塾大学日吉紀要, pp. 105-124.
- 芦野文武・伊藤達也（2020）：「現代日本語における格助詞「で」と「から」の比較—本質的機能の仮説と制約の説明」、『藝文研究』, 118, 慶應義塾大学文学部, pp. 79-93.
- 芦野文武・伊藤達也（2022）：「現代日本語における格助詞「に」の発話意味論的記述」、『名古屋外国語大学論集』, 10, pp. 117-143.
- 荒正子（1983）：「カラ格の名詞と動詞のくみあわせ」, 言語学研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』, むぎ書房, pp. 397-425.
- 伊藤達也（2015）：「語彙意味論に適する「相互依存的」構成性について」、『名古屋外国語大学外国語学部紀要』, 48, pp. 135-143.
- 北原保雄（編）（2021）：『明鏡国語辞典 第三版』, 大修館書店.
- 熊井浩子（2018）：「カラ受身文の用法に関する一考察」, 『静岡大学国際交流センター紀要』, 12, pp. 1-22.
- 新村出（編）（1983）：『広辞苑 第三版』, 岩波書店.
- 菅井三実（2007）：「現代日本語における奪格の意味記述」, 『兵庫教育大学研究紀要』, 30, pp. 49-58.
- （2008）：「現代日本語の格体系から見た原因 NP の格標示について」, 『言語表現研究』, 24, 『兵庫教育大学言語表現研究会』, pp. 1-11.
- 砂川有里子（1984）：「『ニ』と『カラ』の使い分けと動詞の意味構造について」, 『日本語・日本文化』, 12号, 大阪外国語大学研究留学生別科, pp. 71-86.
- 張麟声（1995）：「ガとカラー能動文における動作主を表す用法—」, 宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上） 単文編』, くろしお出版, pp. 43-66.
- 日本語記述文法研究会（編）（2009）：『現代日本語文法 2』, くろしお出版.
- 朴海煥（1996）：「形容詞文における助詞『と・から・で』の用法」, 『早稲田大学 国文学研究』 119, pp. 81-91.
- 盤若洋子（2015）：『格助詞「で」の研究—深層格と包括の意味機能—』, 拓殖大学大学院言語教育研究科言語教育学専攻, 博士論文.
- 細川由紀子（1986）：「日本語の受身文における動作主のマーカーについて」, 『国語学』, 144, 国立国語研究所, pp. 1-12.
- 森田良行（1989）：『基礎日本語辞典』, 角川書店.

- 森山新 (2008) : 『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』, ひつじ書房.
- 山田敏弘 (2003) : 「起因を表す格助詞「に」「で」「から」」, 『岐阜大学国語国文学』, 30, pp. 13-23.
- 渡辺義夫 (1983) : 「カラ格の名詞と動詞とのくみあわせ」, 言語学研究会 (編), pp. 353-395.